

秋田県文化調査報告書第100集

小浜沢遺跡発掘調査報告書

1983・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

小浜沢遺跡は、国定公園男鹿半島の北磯に所在する縄文時代の海辺の遺跡であり、さらに中世の城長根館跡としても知られているところであり、この一部が県道改良工事によって破壊されることになり、記録保存を目的に緊急発掘調査を実施したものであります。その結果、縄文時代の竪穴住居跡など貴重な遺構が確認されました。男鹿半島は地質・考古・歴史等の各分野において学問的に非常に興味深い地域であり、小浜沢遺跡の発掘成果は男鹿の歴史を知る上での欠くことのできない資料と考えられます。

最後にこの調査に多大の御協力をいただきました秋田土木事務所、男鹿市教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

例 言

1. 本書は秋田県男鹿市北浦西黒沢に所在する小浜沢遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 本書の執筆、編集は熊谷太郎が行い、遺物の実測と採拓は米川一郎、武田美智子、佐藤せい子、トレースは大高博康、桧森好広が担当した。
3. 発掘調査と出土土器については次の各氏から御教示を得た。記して感謝申しあげる。

秋田県立博物館主任学芸主事 礎 村 朝次郎

秋田県教育庁中央教育事務所社会教育主事 大 守 重 康

男鹿市企画開発室主任 泉 明

青森県立埋蔵文化財センター主事 三 浦 圭 介

（助）岩手県埋蔵文化財センター専門調査員 高橋 與右衛門

4. 石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。
5. 第2章第1節「遺跡付近の地形と地質」は、山本郡八森町立観海小学校教諭工藤英美氏の執筆である。
6. 土色の表記は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所、色票監修『新版、標準上色帖』によった。
7. 挿図における遺構の縮尺は1/80、遺物は1/3である。
8. 本文、実測図に使用記載した略記号は下記のとおりである。

S I …… 竪穴住居跡。 S K I …… 竪穴状遺構。 S K …… 土壙。 S D …… 空堀。

目 次

序	
例 言	
第1章 はじめに	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査の組織と構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 遺跡周辺の地形と地質	3
第3章 発掘調査の概要	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 調査の方法	5
第3節 調査経過	5
第4章 調査の記録	9
第1節 検出遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
(2) 竪穴状遺構	9
(3) 土 壙	12
(4) 遺構外の出土遺物	17
2 中世の遺構と遺物	23
第5章 まとめ	24

插图目次

第1图	遺跡周辺地形図……………	2	第10图	S K I 02 竖穴状遺構実測図……………	14
第2图	男鹿半島段丘区分図……………	4	第11图	S K 01、03、04、05 土壤実測図……………	15
第3图	小浜沢遺跡地形・調査区位置図……………	6	第12图	S K 01、02、03、04 土壤出土遺物……………	16
第4图	遺跡基本土層図……………	7	第13图	遺構外出土土器 (1)……………	18
第5图	遺構配置図……………	8	第14图	遺構外出土土器 (2)……………	19
第6图	S I 01 竖穴住居跡、S K 02 土壤実測図……………	10	第15图	遺構外出土土器 (1)……………	21
第7图	S I 01 竖穴住居跡出土遺物……………	11	第16图	遺構外出土土器 (2)……………	22
第8图	S K I 01 竖穴状遺構実測図……………	12	第17图	S D 01 空堀実測図……………	23
第9图	S K 02 竖穴状遺構実測図……………	13			

表目次

第1表	遺構外出土土器観察表……………	20
-----	-----------------	----

図版目次

図版1	遺跡全景・発掘調査前	図版7	S I 01、S K 01、S K 03、S K 04、S K I 02 遺構内出土遺物
図版2	発掘調査風景・調査終了状況	図版8	遺構外出土土器 (1)
図版3	S I 01 竖穴住居跡	図版9	遺構外出土土器 (2)
図版4	S K I 01 竖穴状遺構・S K 03、04、05 土壤	図版10	遺構外出土土器
図版5	S K I 02 竖穴状遺構		
図版6	S D 01 空堀調査前・後		

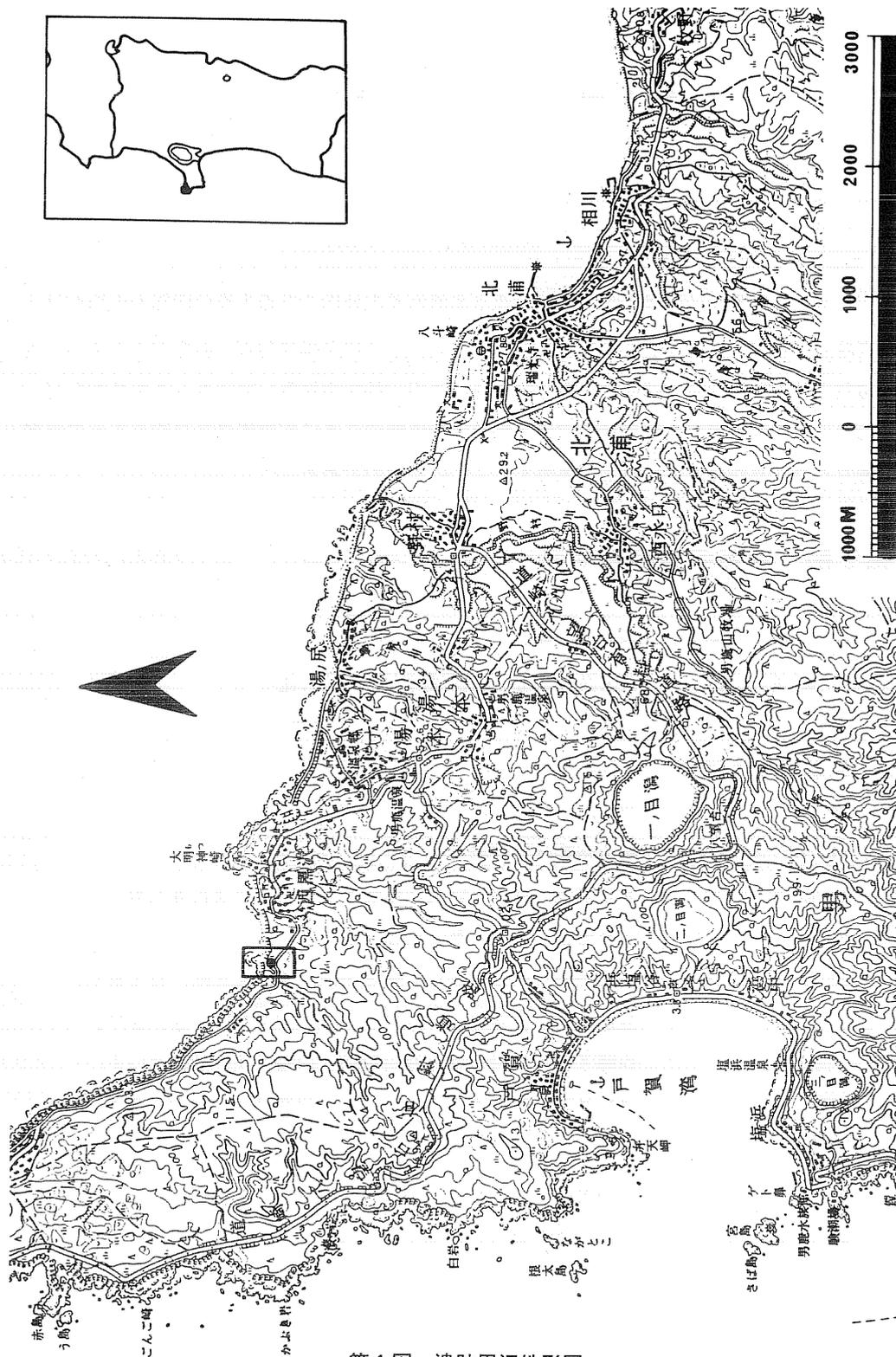
第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経過

昭和54年度から秋田土木事務所では、男鹿市北浦西黒沢地内で県道男鹿公園線の道路改良工事を実施してきたが、昭和57年度の道路改良工事区内に秋田県遺跡地区に記載のある小浜沢遺跡の遺物包含地と城長根と呼ばれる館跡があり、その一部が道路敷にかかることが判明した。このため、秋田県教育委員会では秋田土木事務所の依頼のもとに記録保存を目的とする緊急発掘調査を4月20日から5月1日まで実施することにしたのである。

第2節 調査の組織と構成

遺 跡 名	小浜沢遺跡
遺 跡 所 在 地	秋田県男鹿市北浦西黒沢字小浜沢41他
調 査 期 間	昭和57年4月20日～5月1日
調 査 対 象 面 積	500㎡
調 査 面 積	480㎡
調 査 主 体	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	熊谷太郎（秋田県埋蔵文化財センター 社会教育主事）
補 佐 員	大高博康、米川一郎、桧森好広
調 査 作 業 員	佐藤金治、佐藤長盛、佐藤酷太郎、鎌田東五郎、石川喜治、 桐越貴司、佐藤時子、本川清子、加藤チヤ、嘉藤ジョウ、 白幡ミキ、川村令子、石川秋子、伊藤テイ、鎌田けい子、 鎌田洋子、鎌田恵美、鎌田チヤ、伊藤カヨ、鎌田ヒデ子、 細川タカエ
整 理 作 業 員	佐藤せい子、武田美智子
調 査 協 力 機 関	秋田土木事務所、男鹿市教育委員会



第1図 遺跡周辺地形図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡付近の地形と地質

小浜沢遺跡は男鹿半島の北端、すなわち入道崎に近い北縁部に位置し、付近には数段の海成段丘地形(第2図)が形成されている。遺跡はこれら段丘群のうち相川段丘面上にある。

相川段丘は、相川から北浦にかけて広く分布し、海面高度、ほぼ30mの段丘面を保ちながら非常に平坦な地形を形成している。さらに西方では段丘面は急に狭くなり、海岸線にほぼ平行に入道崎へと続き、当遺跡はその一部にあることになる。なお、この段丘は今泉(1977)の区分ではVIIに相当する。

遺跡付近の段丘堆積物は砂、礫よりなり、その層厚は1m前後で非常に薄い。しかし、基盤の凹凸が激しく、凹部では層厚が厚くなる。礫の形状は大礫～中礫が最も多く、円磨の程度は垂円礫から垂角礫を示す。

地表付近の段丘堆積物中に厚さ10cmで灰白色の砂礫層が挟まれており、その礫を調べたら次の通りであった。

礫の大きさは細礫がほとんどで、わずかに中礫が混在する。岩質は泥岩、流紋岩、石英粒がほとんどで、いずれも垂円礫から円礫の形状を示す。また、わずかに安山岩や浮石も認められた。

段丘堆積物の下には、不整合の関係で新第三紀中新世中期の西黒沢層があり、不整合面付近では砂岩である。その下位はしだいに泥質になり、苦灰岩質泥灰岩を挟むようになる。またその下位には暗青灰色の泥岩があり、多数の植物遺体が含まれる。

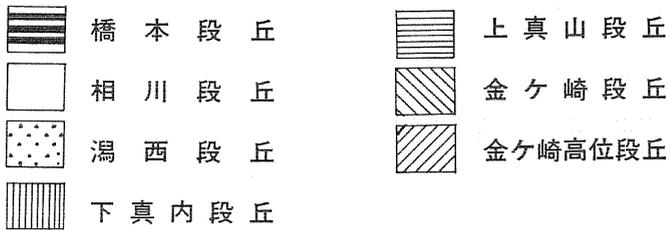
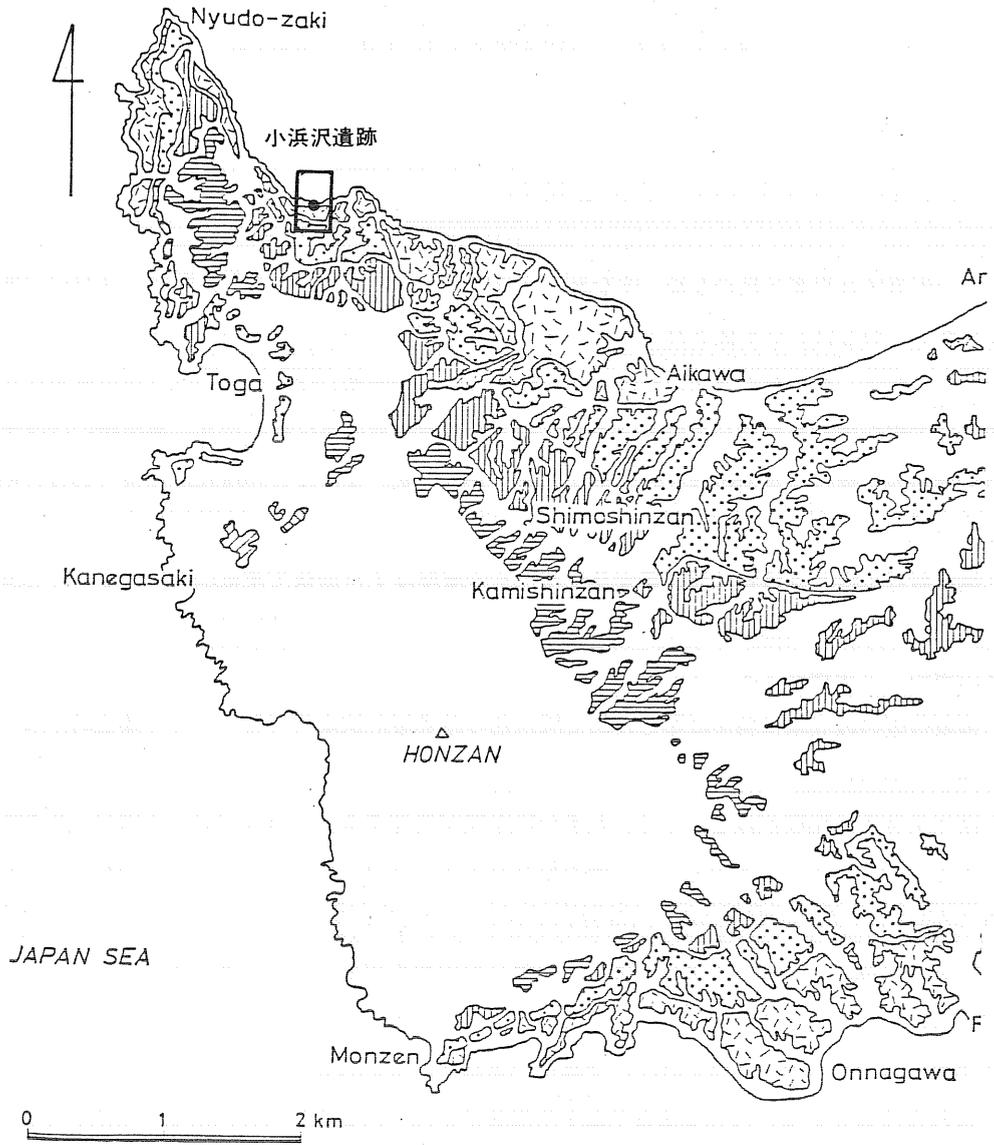
これらのことから、段丘堆積物の直下の地層は、西黒沢層上部にあたるものと思われる。

文 献

藤岡一男 1973 男鹿半島の地質 男鹿半島自然公園学術調査報告 日本自然保護協会 5-34

今泉俊文 1977 男鹿半島の地殻変動と地震 東北地理 35-44

潟西層団体研究グループ 投稿中 男鹿半島北東部潟西地域における潟西層



第2図 男鹿半島段丘区分図

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概要

小浜沢遺跡は男鹿市北浦西黒沢字戸沢に建設されている男鹿市立北磯小、中学校の北東400m、海に臨む標高27mの段丘上に立地する。

段丘は松と杉の林におおわれ、舌状を呈して北方の日本海に突出しており、先端は断崖となって海に落ち込んでいる。段丘上は一部に僅かの起伏が認められるがおおむね平坦で、中央部分を県道が急カーブを描いて通過している。発掘調査予定地は段丘の先端に近い部分で東に緩く傾斜しており、その南側の所には館跡の空堀と見られる溝状の凹みが東西に認められる。遺跡の基本土層は地山まで暗褐色土の一層で小礫を含むものである。遺構の確認はこの土層を除去した後に表われる黄褐色の地山面である。

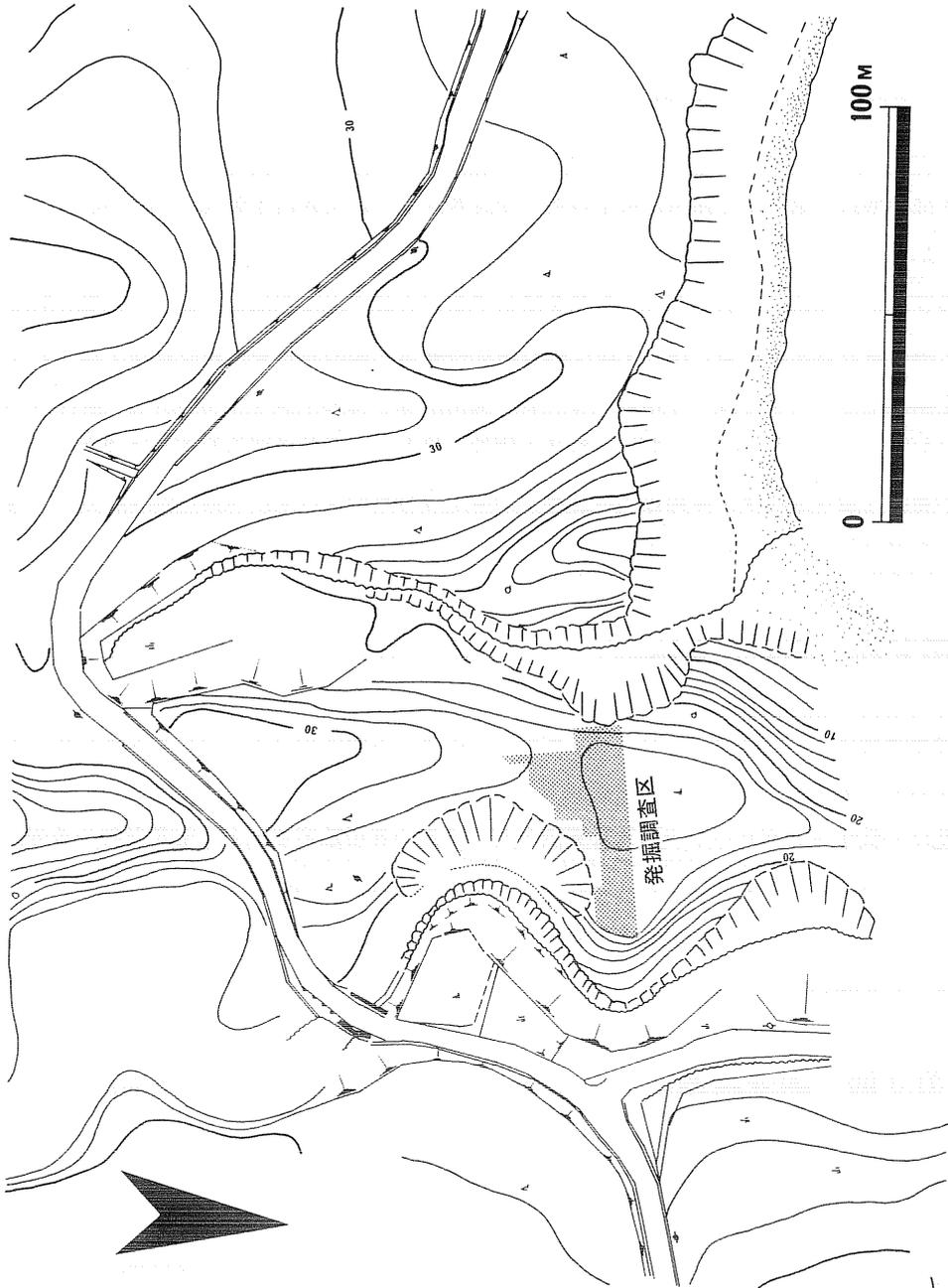
第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド方式で行った。秋田県土木部作成路線地形図における基準点No.33を発掘基準点D-01とし、南北及び東西方向にかけて4m×4mのグリッドを設定した。南北方向は磁北に一致する。グリッドの名称は東西方向の基線の算用数字2桁と、南北方向の基線のアルファベット1文字の組み合わせで表現した。算用数字は東西方向に(01、02……) アルファベットは北方向に(A・B・C…)と順序に進行させて行く。南西端のグリッド杭名称はA-01のように記載される。

第3節 調査経過

発掘調査は昭和57年4月20日から5月1日まで行った。

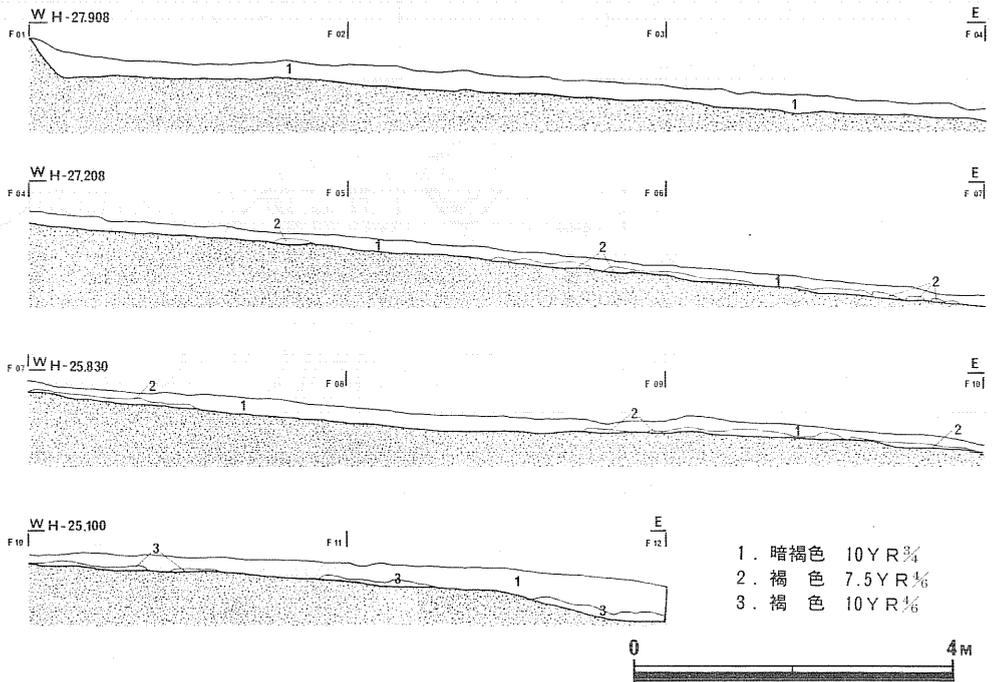
4月20日午前中作業員に対し調査の目的、方法、作業内容等を説明し、終了後直ちに調査区の下刈りを行う。午後はグリッド設定作業。21日グリッド設定作業を続行。並行してグリッド設定完了部分の粗掘りと抜根作業を行う。表土層の厚さは15～20cm。土層観察の為にEライン及び03ラインの土層は残す。22日表土層下位面より縄文土器が検出されてくる。E-02グリッドにて遺構検出。S K I 01 縦穴状遺構とする。早速精査を開始する。23日空堀の堆積土中から縄



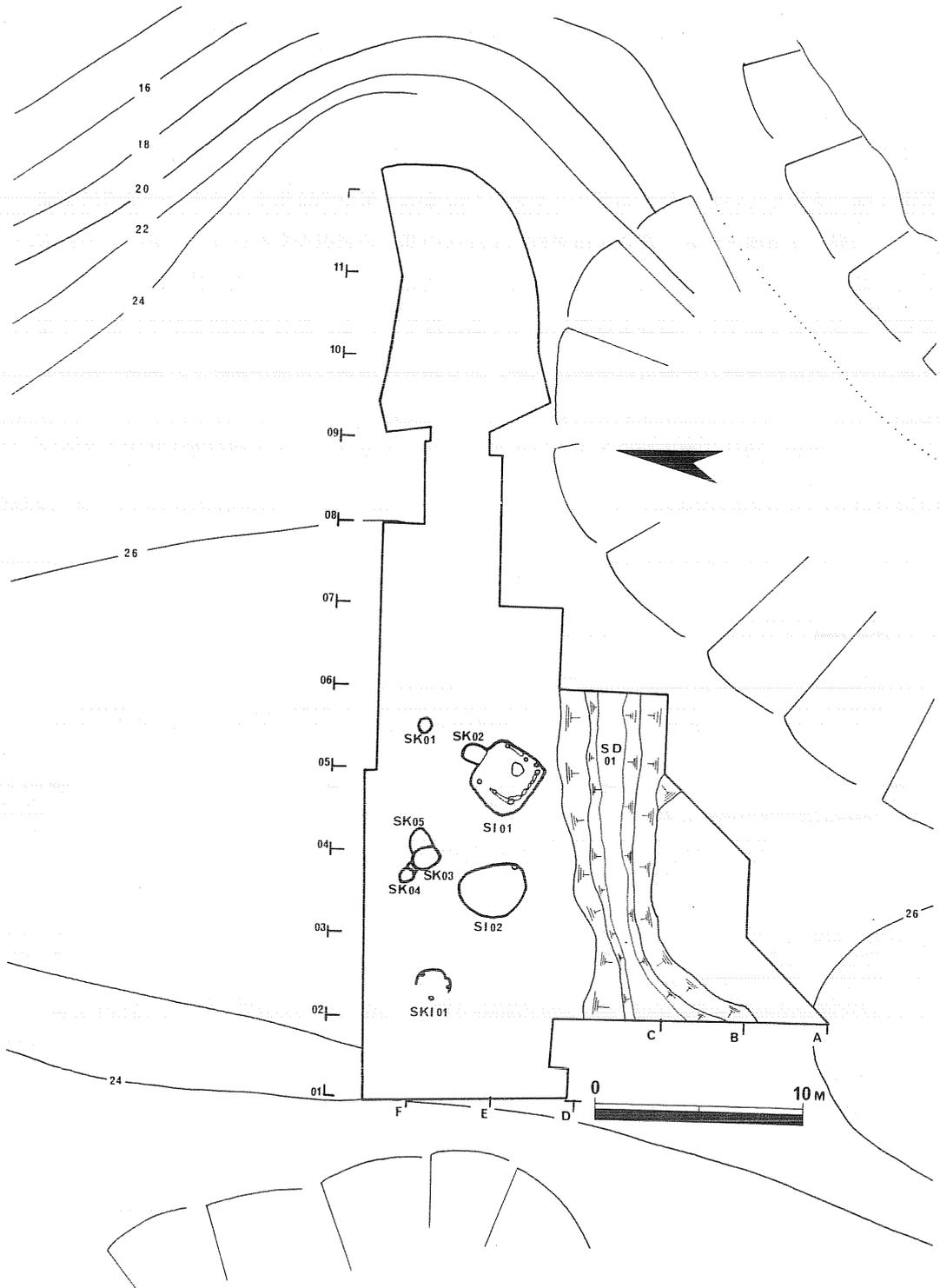
第3図 小浜沢遺跡地形・調査区位置図

文土器、石器及び多量の礫を検出。遺物は堆積土の流れ込みによるものである事を確認。E-03、04グリッドにて遺構検出。3基の土壇が重複しておりS K 03、04、05土壇とする。埋土の上面から多くの縄文土器片が出土。埋蔵文化財センター副所長来跡。24日土壇の精査開始。男鹿市企画開発室主任泉 明氏、北磯小中学校児童・生徒20名見学に来跡。男鹿市文化財審議委員来跡。26日D-04グリッドにて遺構検出。S I 01竪穴住居跡とする。遺構精査開始。東辺部でS K 02土壇と重複している。D-03グリッドを中心に遺物が集中的に出土。精査の結果遺構確認S K I 02竪穴状遺構とする。調査区南側松林未伐採の部分の発掘作業を行う。遺跡土層図作成。県立博物館副館長門間光夫、主任学芸主事磯村朝次郎両氏来跡。27日S I 02精査開始。調査区北側の粗掘作業を終了し、調査全体図の作成作業に取りかかる。28日空堀精査終了。教育庁文化課学芸主事富樫泰時、主事川越稔両氏来跡。30日調査区南側の粗掘作業終了。遺構の検出なし。

5月1日遺構、遺物の調査記録をすべて完了。午後は作業員に対する発掘調査報告会を持つ。



第4図 遺跡基本土層図



第5図 遺構配置図

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

S I 01竪穴住居跡（第6図、図版3）

〈平面形状〉 南北辺長2.8m、東西辺長3.2mで東西にやや長い隅丸長方形を呈する。北面部でS K 02土壌と重複しており、土壌が新しい。

〈堆積土〉 4層を数える。1層を除き炭化細粒、焼土細粒が混入しており、下層になるに従い多く、遺構内中央部北寄りの部分は特に濃密である。

〈床面〉 壁部付近がわずかながら1段高く、中央部に向い緩やかに落ち込む。凹凸は少なく特にP₁周辺は硬くしまっている。

〈壁〉 緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は12~18cmである。

〈柱穴〉 9本の柱穴が壁面に沿って巡り、その多くは周溝状の溝によって連結している。遺構内各隅部に柱穴を有し、東面部と西面部はその間に1本、南面部は4本がほぼ等間隔で一直線上に並ぶ。

〈付属施設〉 遺構内中央部西寄りと北西隅部にそれぞれP₁、P₂がある。P₁は底面中央部で更に1段深くなる。最深部は床面から18cmの深さである。P₂は浅い凹状を呈す。底面に炭化物が散布し、少量の焼土が認められる。

〈出土遺物〉（第7図、図版7） 縄文土器の出土量は極めて少なく、2層下位部からの出土である。4は底部の破片で底面に縄文を施文している。5は石槍である。

(2) 竪穴状遺構

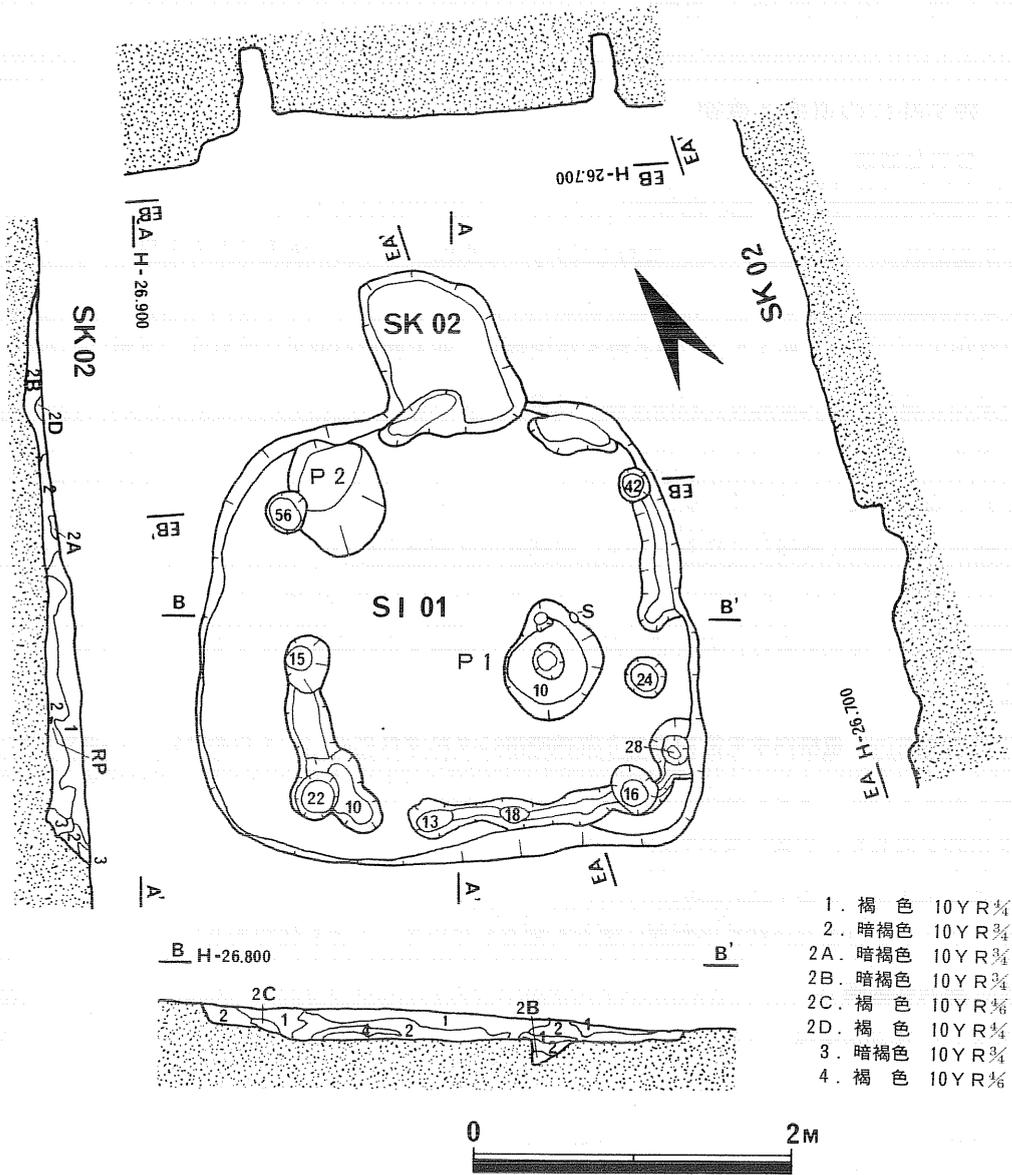
S K I 01竪穴状遺構（第8図、図版4）

〈平面形状〉 西面壁は確認出来なかったが、長軸1.6mの楕円形を呈すると思われる。

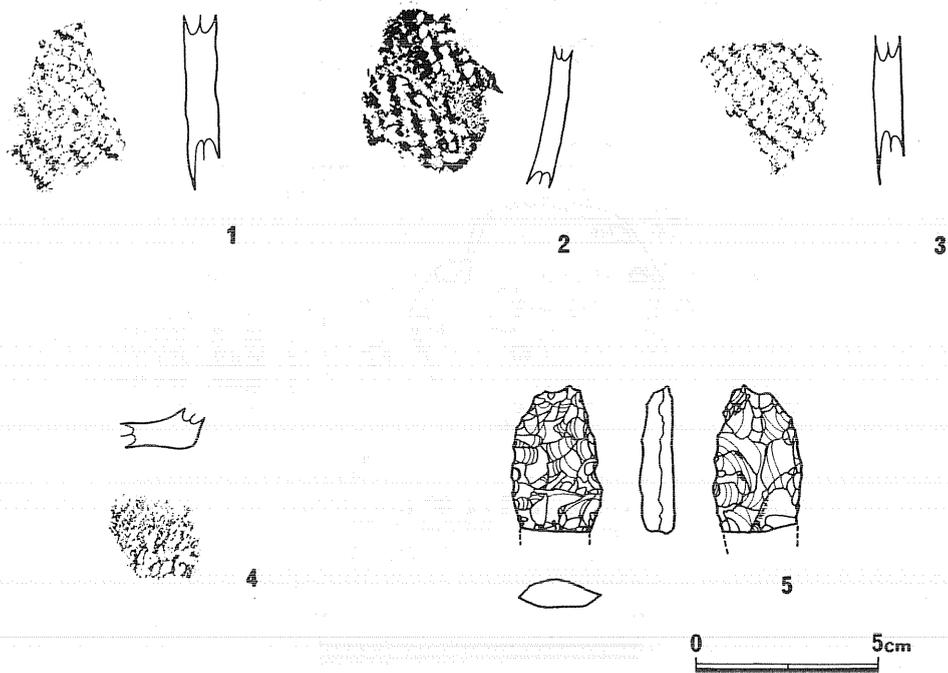
〈堆積土〉 比較的硬くしまった暗褐色土を主体とする。底面近くのは炭化物、焼土細粒を含む。

〈底面〉 中央部に向い緩やかに落ち込むが、凹凸は少なく硬くしまっている。中央部に炭化物細粒、焼土細粒が認められる。

〈壁〉 西面壁は明らかでないが、他の確認出来た部分の壁高は3~5cmである。



第6图 SI 01竖穴住居跡、SK 02土壤実測図



第7図 SI 01 竪穴住居跡出土遺物

〈出土遺物〉 少量の土器片である。文様部分の風化が激しく図化出来なかった。

SK I 02 竪穴状遺構 (第9図 図版5)

〈平面形状〉 長軸3m、短軸2.8mの楕円形を呈するが、西面の弧はやや直線状をなす。

〈堆積土〉 1層は極めて硬くしまった暗褐色土で、部分的に炭化物細粒を含み、遺物の大半はこの層中から出土した。2層においては遺構中央部に炭化物、焼土細粒が多い。

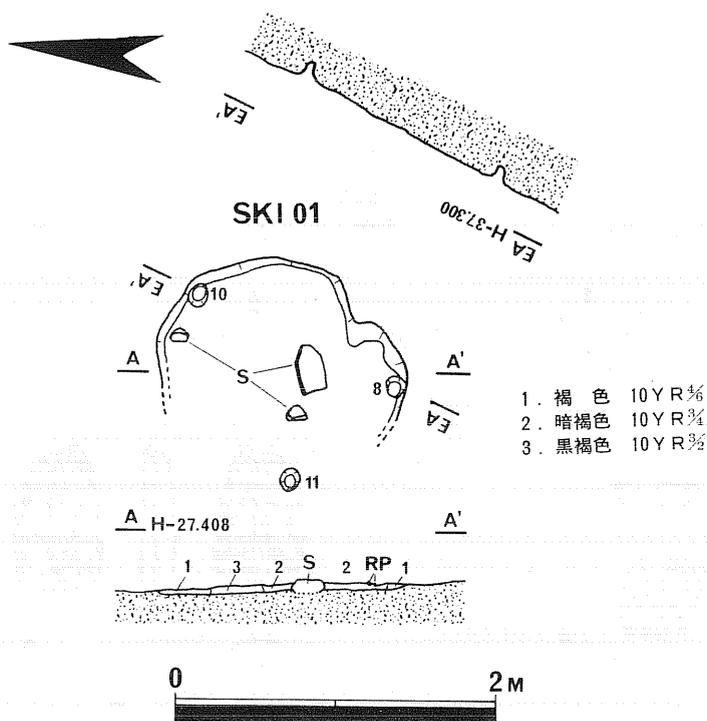
〈底面〉 凹凸が少なく堅くしまっており、中心部に向って緩やかに落ち込む。中心付近に焼土細粒が散布している。

〈壁〉 北西壁は緩やかに外傾するが、他の壁はほぼ直角に立ち上がる。壁高は6～9cm。

〈柱穴〉 遺構内東南隅部に1本。浅いが確実な堀り方である。

〈出土遺物〉 (第10図 図版7) 土器：多くは1層下位部で出土した。1は深鉢形の口縁部破片で斜行縄文が施文されている。3、4は口縁部に隆帯を付し、その隆帯上に先端を丸めた棒状工具による刺突文を有する。隆帯は横位に二条あるが、3は更に直交する隆帯で懸垂状の意匠をもたせている。5は棒状工具で深く幅広い沈線を斜状に引き合わせて羽状のような効果を表わす。2は捺糸文、6、7は土器底部で、6は底面に縄文を施文し、更にその周辺部に短かい引搔文を施文する。7の底面周縁は張り出し、あげ底状を呈する。

石器：8は縦型の石匕、9は石槍、10は搔器で刃部は片面加工、13は石錘である。



第8図 SKI 01 竪穴状遺構実測図

(3) 土 壌

S K01土壌 (第11図)

<平面形状> 長軸1.8mの楕円形を呈す。

<堆積土> 黒褐色土を主体にし、底面付近で少量の炭化物を混入する。

<底面> 中央部に向い極めて緩やかに傾斜する。凹凸は少なくしまっている。

<壁> 緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は5～8cm。

S K02土壌 (第6図、図版3)

<平面形状> 東西辺長0.8m、南北辺長1.0mで平行四辺形状を呈する。S I01竪穴住居跡と南隅部で重複し、住居跡よりは一段深く掘り込まれている。埋土状況から住居跡が先行して構築。

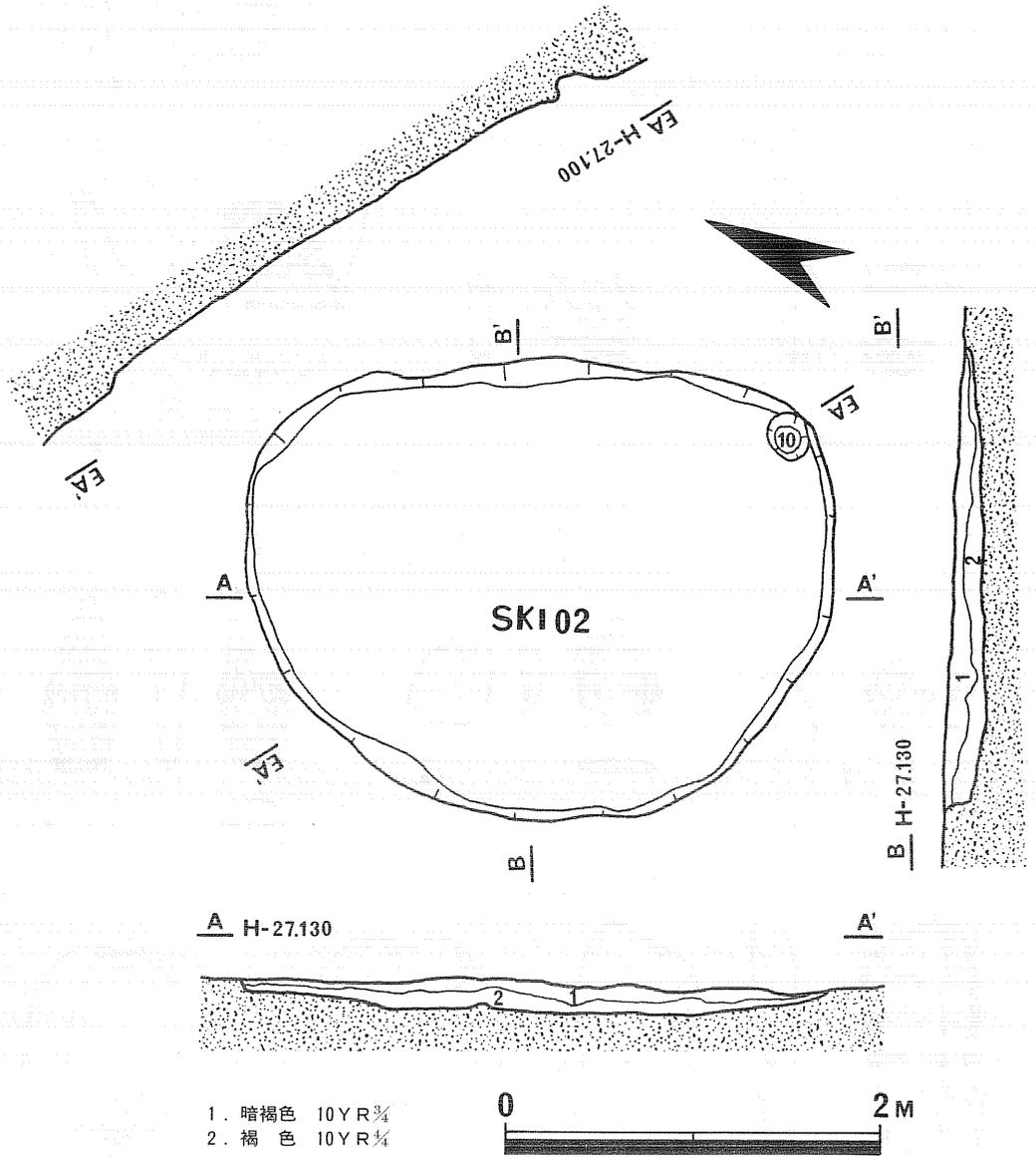
<堆積土> 暗褐色土からなる1層であるが、部分的に褐色土が認められる。

<底面> 南方向に傾斜しており、南面部分は特に硬くしまっている。

<壁> 北面壁は緩やかに外傾、他壁はほぼ直角に立ち上がる。壁高は10cm。

S K03、04、05土壌 (第11図、図版4)

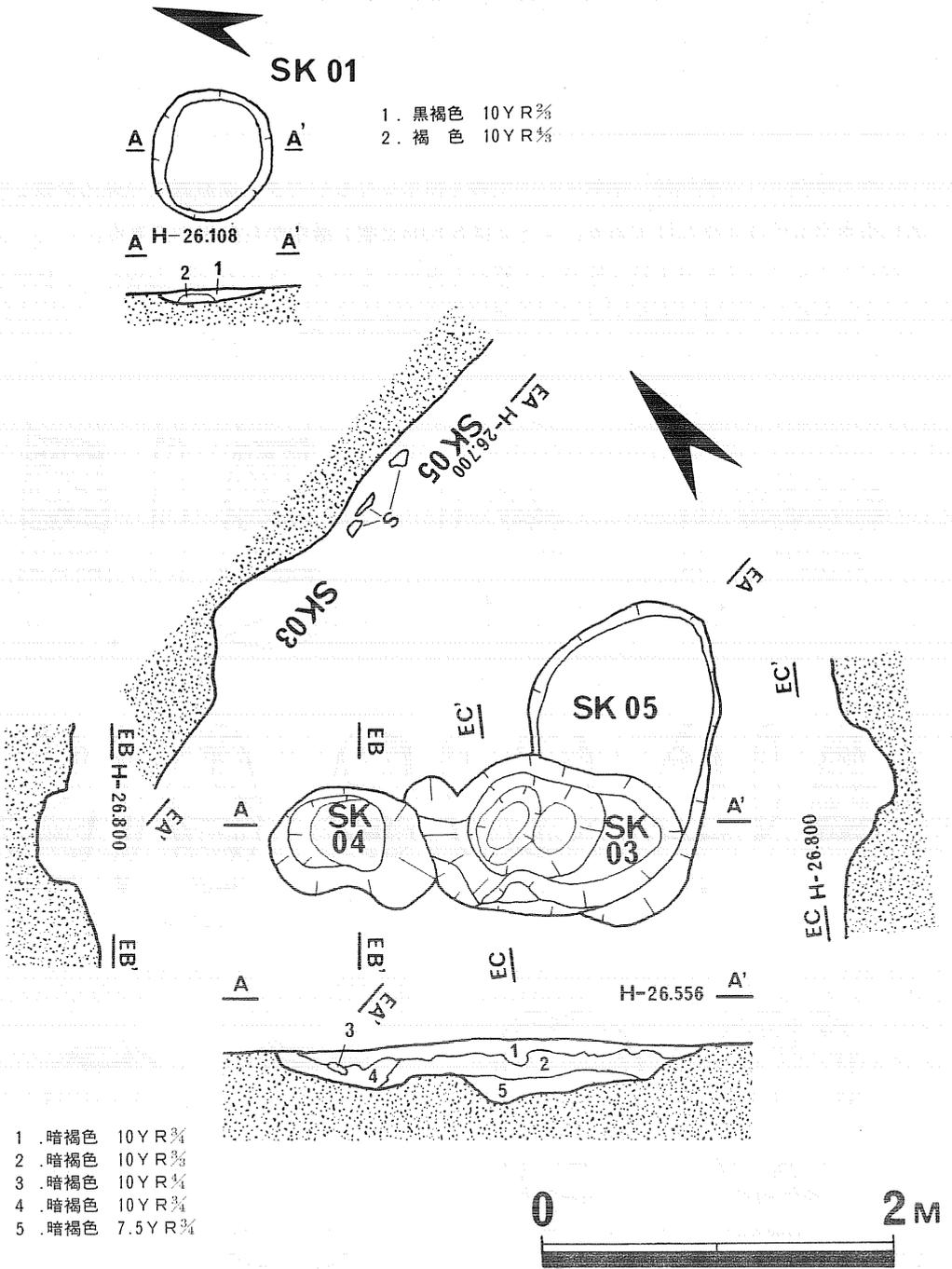
<平面形状> S K04、05は不整楕円形を呈し、それぞれ長軸1.6m、短軸1.0mを測る。S K05は長軸1.9mの楕円形を呈し、S K03に先行する。



第9図 SKI 02 豎穴状遺構実測図



第10图 SK I 02竖穴状遺構出土遺物



第11图 SK 01、03、04、05土壤实测图

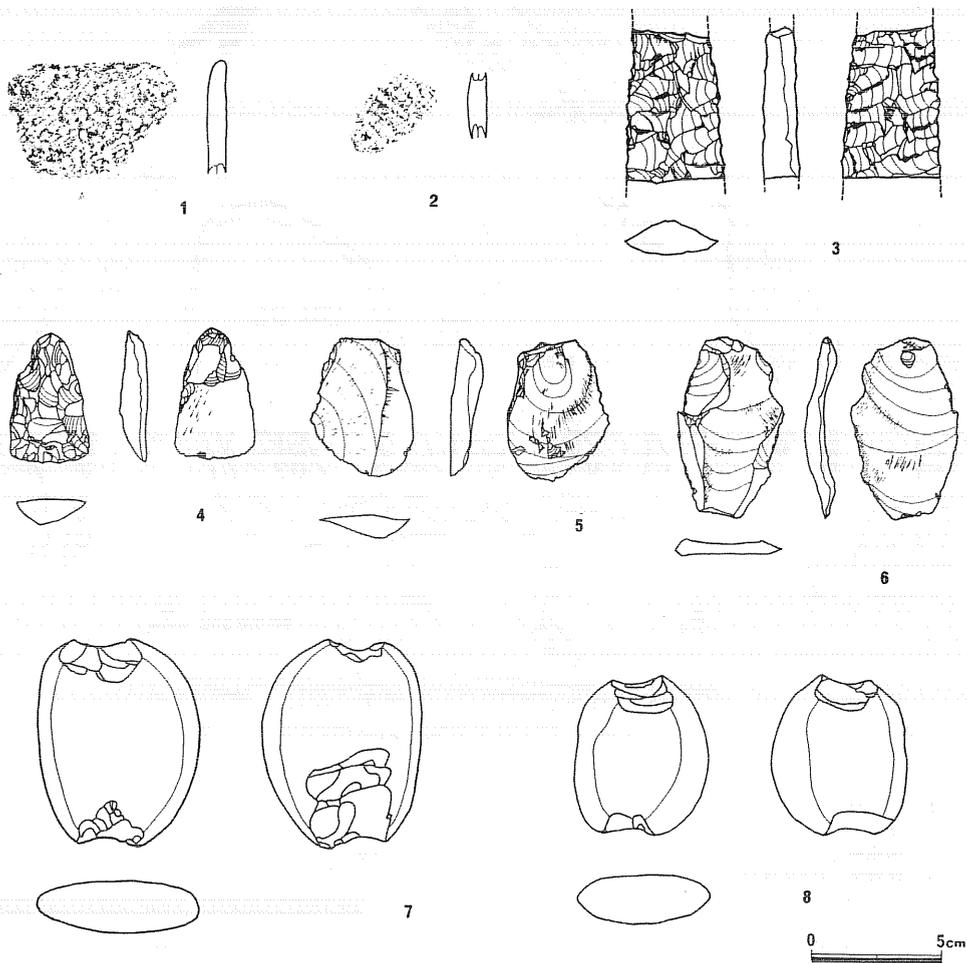
〈堆積土〉 いずれも暗褐色土を主体とし、S K03は褐色土。S K04は焼土細粒を多く含有する。S K05は堆積土上面で人頭大の礫7個が集積していた。

〈底面〉 S K04は凹凸が激しくもろい。他は平坦でしまっている。S K03の西面部に2個のピットを検出。

〈壁〉 外傾して立ち上がる。

〈出土遺物〉 (第12図 図版7) 土器：出土したものの多くは器表面の風化が激しく、図化出来たものは2点だけである。1・2はS K03土壌2層中からの出土である。

石器：3～7はS K03土壌2層及び5層から出土のもので、3の石槍は先端部及び柄部を欠く。4は石筥、7・8は石錘でS K042層からの出土である。



第12図 SK 01、02、03、04土壌出土遺物

(4) 遺構外の出土遺物

土 器 (第13図、14図 図版8、9)

出土したものはいずれも破片で、器表面の風化が著しい。器形は深鉢もしくはそれに類するもので本項ではこれを口縁部(A)、胴部(B)、底部(C)に分離して、それぞれの特徴を記す。

(A) 口縁部もしくは口縁部付近の土器片である。口縁部の形態はほぼ直立するものと外反して立ち上がるものがある。施文は縄文もしくは撚糸文が口縁部から直ちに施される場合が多く無文のものは無い。器形はいずれも深鉢形と考えられる。

A-1類 (第13図 1~4)

土器内面に条痕もしくは条線を口縁部に平行して数条施文するものである。3は短く斜状に施文された数条単位の条線をはさみ、櫛状工具によると思われる引搔文風のもの2~3条横走する。1、4は胎土に少量の繊維を含む。

A-2類 (第13図 5~13)

器表面に斜行縄文を施す類である。5~6はLR、7~13はRLの斜行縄文で、9~13は口縁部が外反する。10、12、13は胎土に繊維を含む。器質は焼成が比較的良好でやや硬めのもの(5、10、12、13)と、もろく軟質のものがある。

A-3類 (第13図 14~17)

器表面に撚糸文を施文するもので、16は横走する撚糸文である。量的には極めて少ない。15~17は口縁部が外反し口唇部は薄い。15、16は胎土に繊維の混入が見られる。

(B) 胴部の土器片である。形態はほぼ直立するもの、内湾気味に立ち上がるもの、及び量的には極めて少ないが外反するものがある。

B-1類 (第13図 18~25)

器表面に斜行縄文を施文するものである。18~23はRL、24、25はLR、13、18は胎土に少量、25は多量の繊維の混入が認められる。21は内面に横走する条線をわずかに留める。

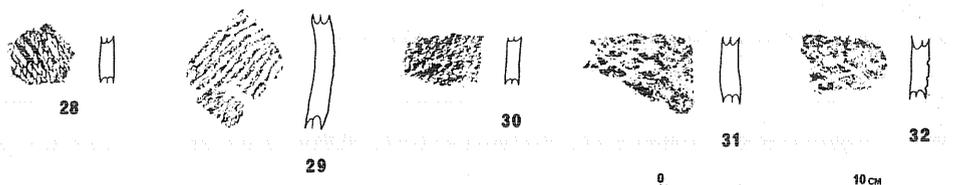
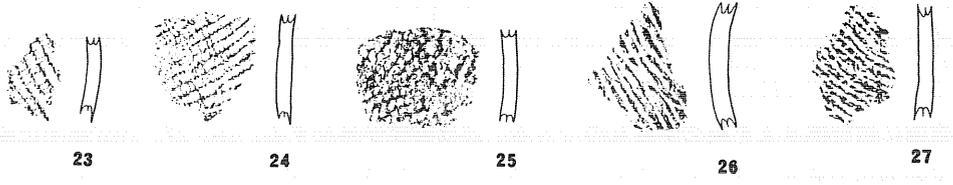
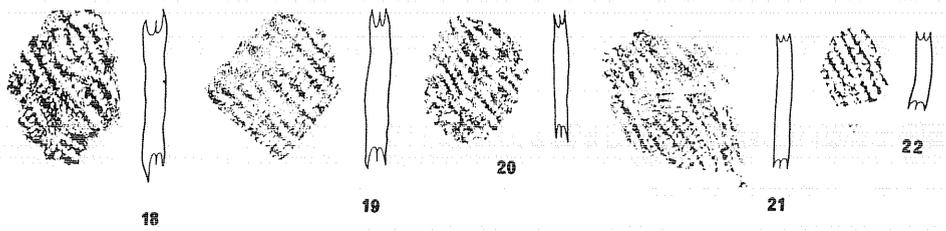
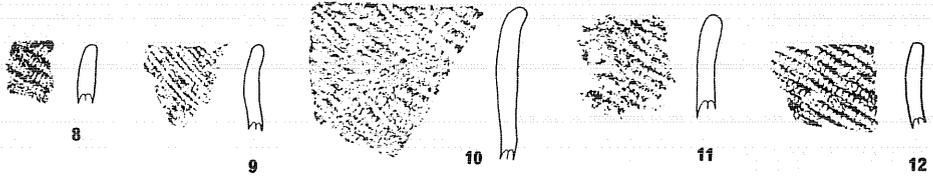
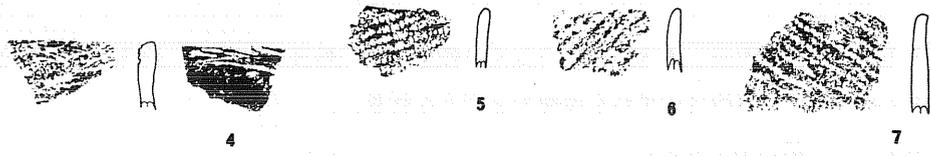
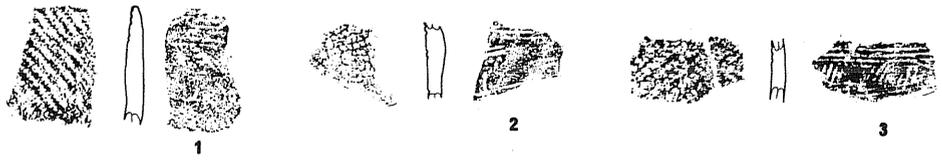
B-2類 (第13図 26~30)

器表面に斜行撚糸文を施文するものである。25は器体が外反する。26、27、29は胎土に繊維の混入が認められる。

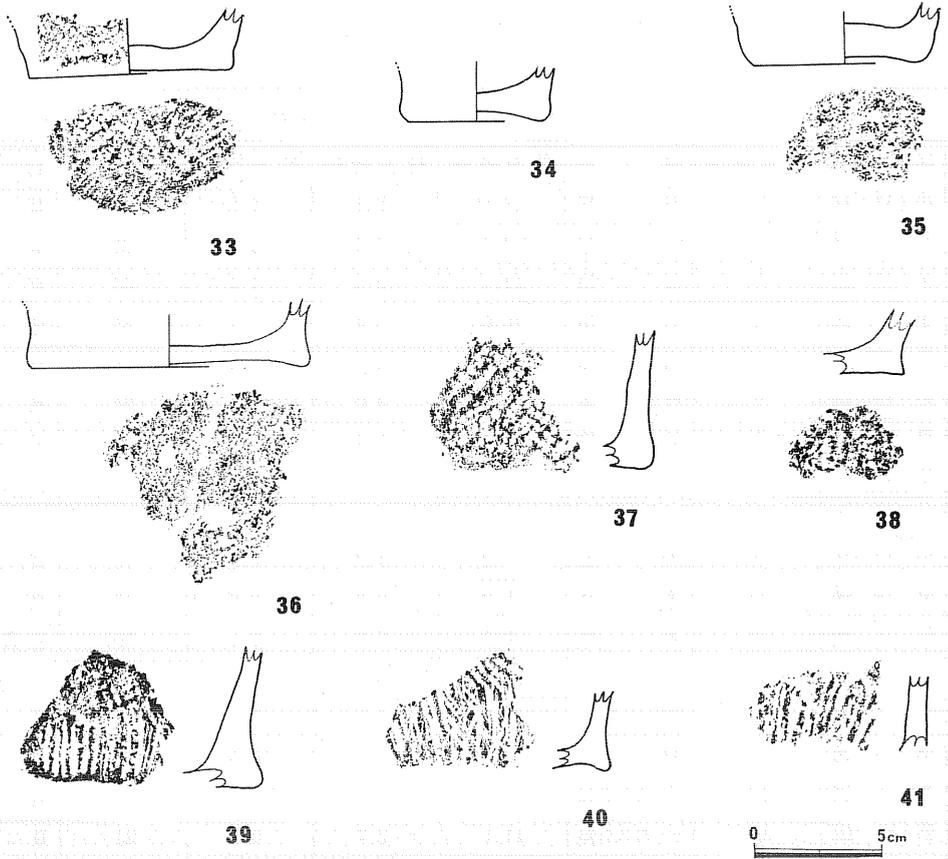
B-3類 (第13図 31~32)

器表面に網目状撚糸文を施文するものである。本遺跡での出土はこの2片のみである。

(C) 土器底部である。底部径は5~9cmの仲間と10~15cmのものに2大別され、出土量は前者が多い。形態から見ると平底のもの、あげ底状のもの、底面の縁部が外に張り出すものがある。施文からは次の2類に分類出来る。



第13图 遺構外出土土器



第14図 遺構外出土土器

C-1類 (第14図 33~38)

胴部下端から底部にかけて縄文の施文されたものである。33、35、36、38は底面にも縄文を施文しており、33は更に底部周辺から底面の中心に向って短かく細い引掻文を施している。34~35は底部があげ底状を呈しており、36、37、38は底面の縁部が外に張り出すものである。

C-2類 (第14図 39~41)

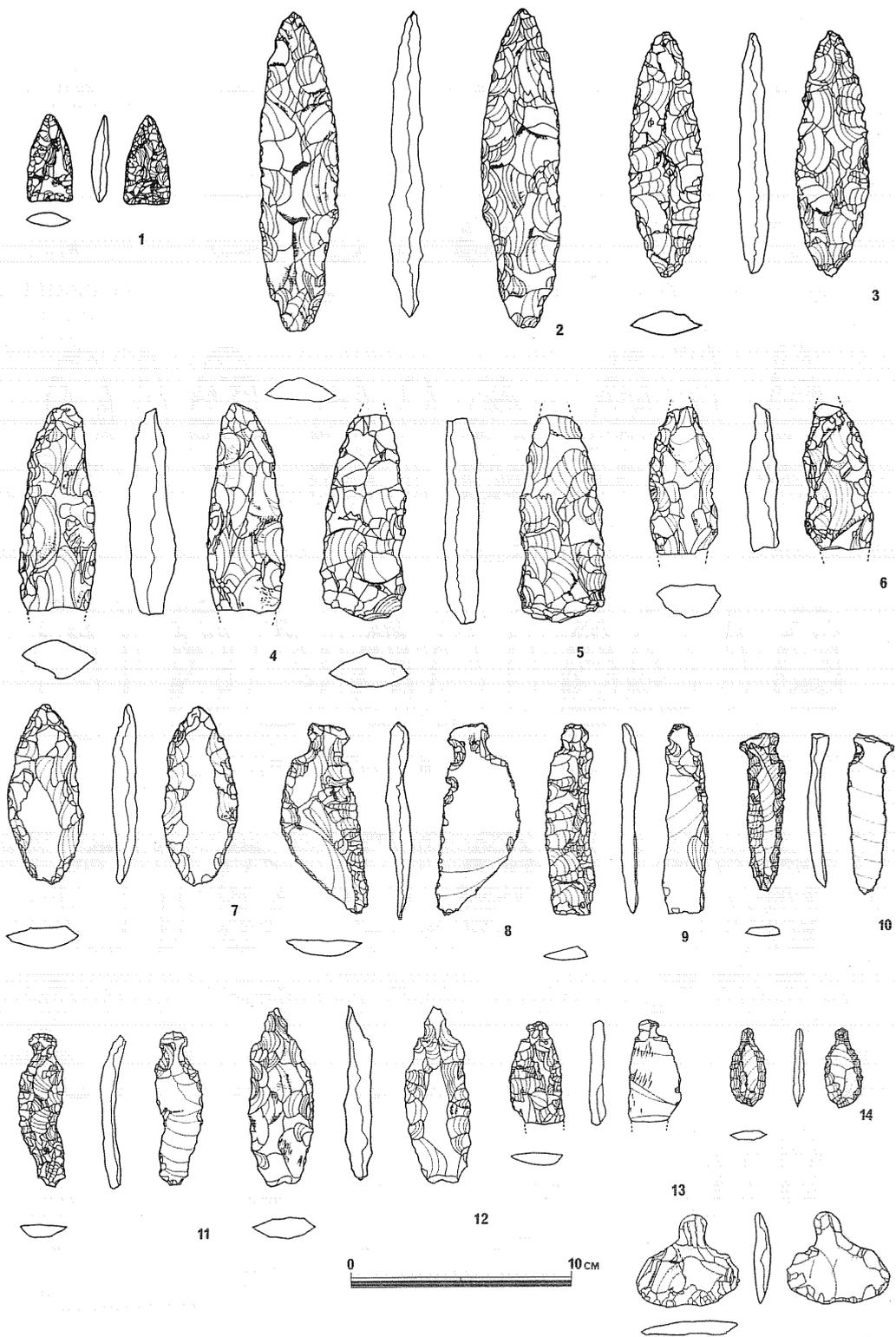
胴部下半から底部にかけて条線を施文するものである。39、40は胴部下半まで斜行縄文を施文し、後に底部付近で垂直に条線を加える。40の場合は更に斜状の条線を重ねる。

石器 (第15図、16図、図版10)

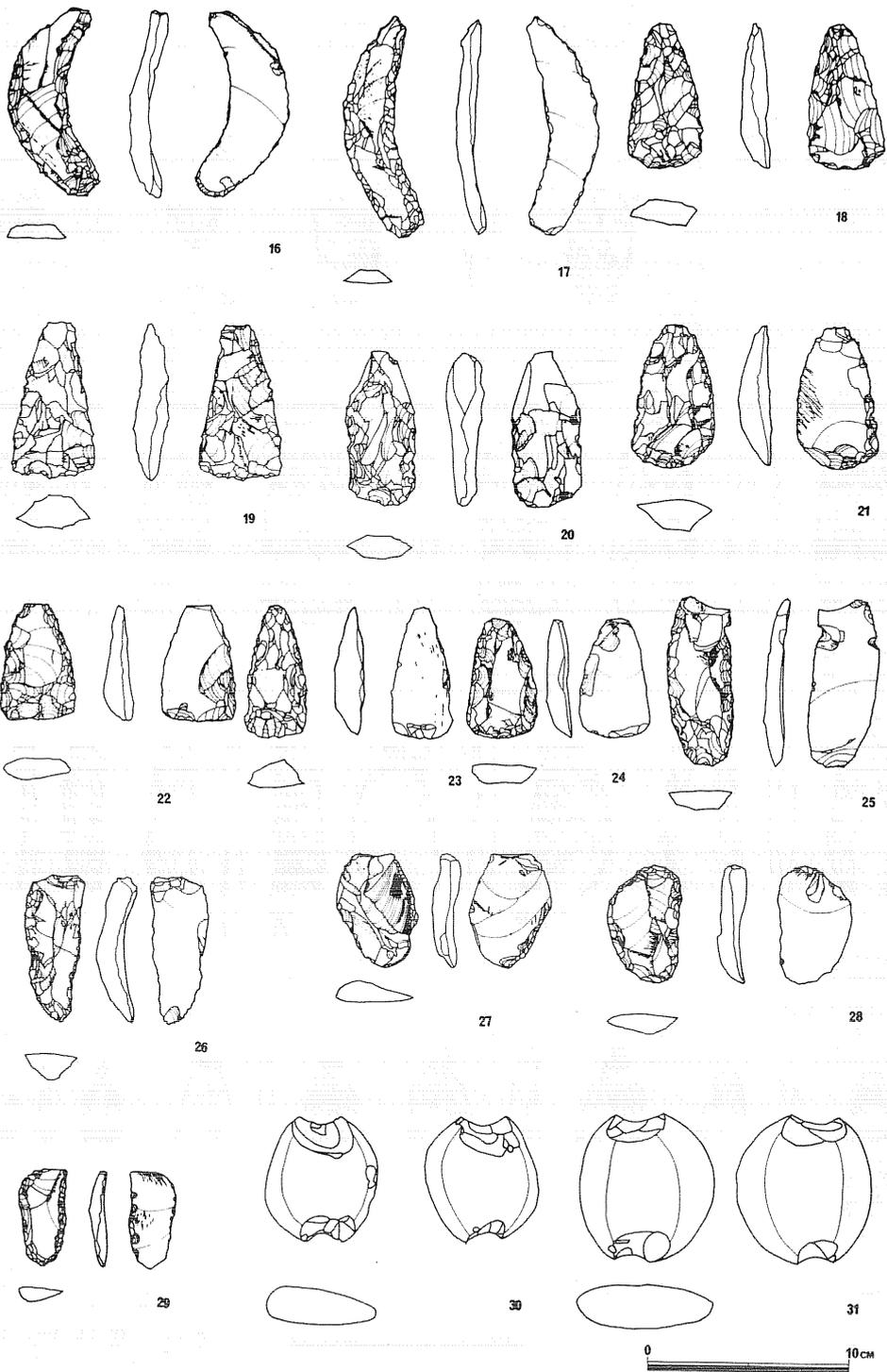
石鏃、石槍、石匕、石筥、三ヶ月状石器、スクレイパー、石錘が出土している。母材は硅質頁岩、流紋岩が多く、男鹿半島では容易に入手出来るものである。石鏃は少なく1点のみで、石匕は縦型、石筥は片面調整が量的に多い。

第1表 遺構外出土石器観察表

図版番号	挿図番号	名称	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
第15図	1	石鏃	4.0	2.1	0.6	6	頁岩
第15図	2	石槍	14.5	3.4	1.3	65	頁岩
第15図	3	石槍	11.6	3.3	1.4	46	頁岩
第15図	4	石槍	10.0	3.4	2.1	65	珪質頁岩
第15図	5	石槍	9.5	4.0	1.4	65	頁岩
第15図	6	石槍	6.7	3.0	1.5	34	頁岩
第15図	7	石槍	8.1	3.4	1.0	28	流紋岩
第15図	8	石匕	8.9	3.6	0.8	27	頁岩
第15図	9	石匕	8.7	2.0	0.8	16	頁岩
第15図	10	石匕	7.2	1.7	0.6	10	頁岩
第15図	11	石匕	7.0	2.0	0.6	12	頁岩
第15図	12	石匕	8.1	2.9	1.1	30	珪質頁岩
第15図	13	石匕	4.6	2.4	0.6	8	流紋岩
第15図	14	石匕	5.9	2.1	0.8	11	玉髓
第15図	15	石匕	3.6	1.6	0.5	5	頁岩
第16図	16	三ヶ月状石器	9.2	2.9	0.9	44	頁岩
第16図	17	三ヶ月状石器	11.1	2.7	0.9	31	頁岩
第16図	18	石筥	7.4	3.7	1.3	35	珪質頁岩
第16図	19	石筥	7.9	4.2	1.7	46	珪質頁岩
第16図	20	石筥	7.9	3.5	1.9	49	珪質頁岩
第16図	21	石筥	7.2	4.1	1.6	42	頁岩
第16図	22	石筥	5.8	3.8	1.4	29	珪質頁岩
第16図	23	石筥	6.7	3.1	1.5	27	頁岩
第16図	24	石筥	6.0	3.5	1.2	26	珪質頁岩
第16図	25	スクレイパー	8.5	3.2	1.1	30	流紋岩
第16図	26	スクレイパー	7.4	2.8	1.4	29.8	頁岩
第16図	27	スクレイパー	5.7	3.9	1.2	26.0	頁岩
第16図	28	スクレイパー	5.9	3.6	1.1	25.4	頁岩
第16図	29	スクレイパー	4.9	2.3	0.8	9.2	頁岩
第16図	30	石錘	5.5	5.4	1.7	76.0	安山岩
第16図	31	石錘	6.9	6.5	2.1	155.8	安山岩



第15图 遺構外出土石器 (1)



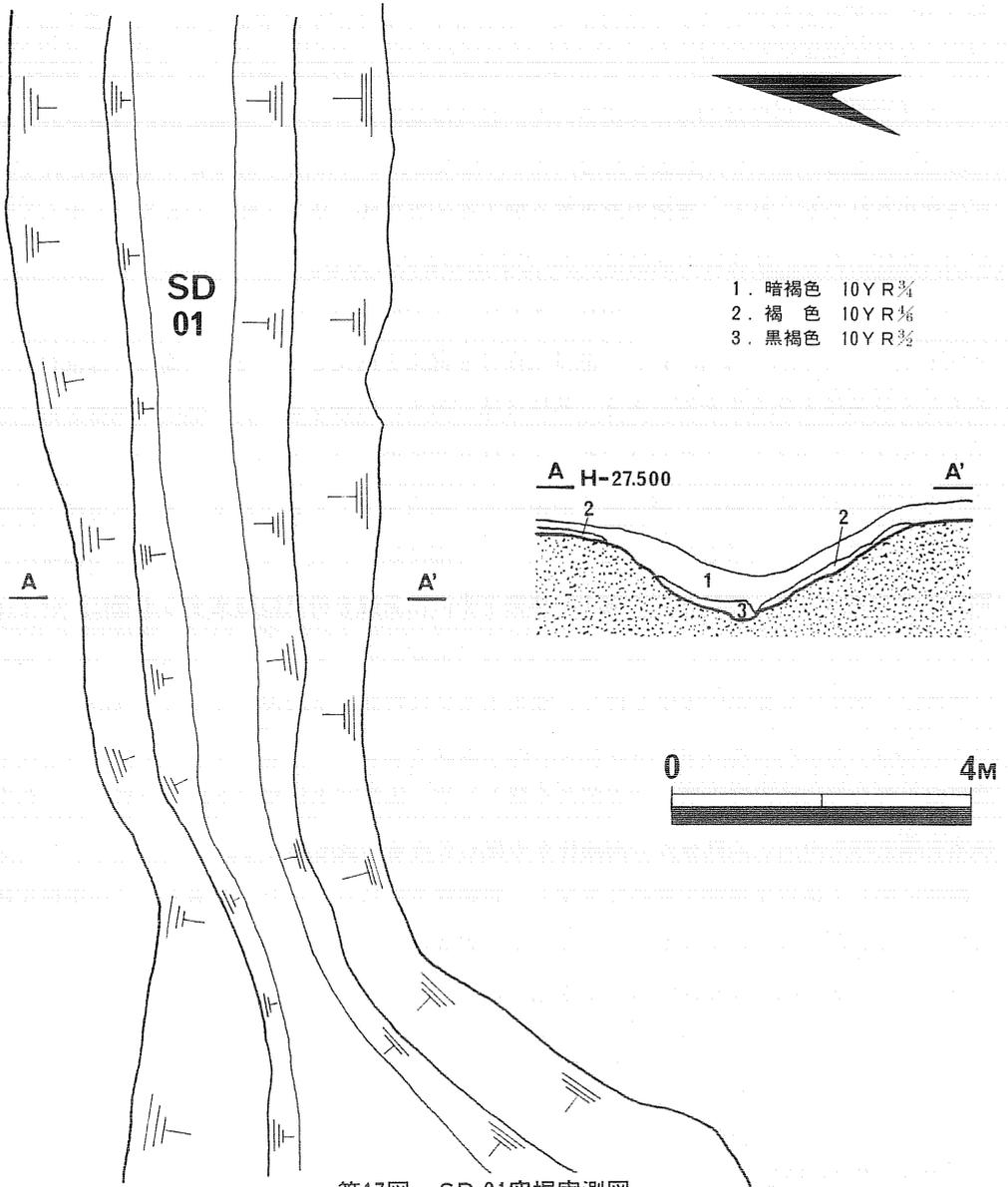
第16図 遺構外出土石器 (2)

2 中世の遺構と遺物

SD 01空堀 (第17図、図版6)

舌状の段丘先端部を東西に横断するもので、全長24.5m、上面幅3.5m~4.2m、底面幅0.8~1.4mを測り、西に行くにしたがい細まり底面も傾斜する。断面は箱築研であるが一部で南壁が急角度に落ち込む所もある。堆積土は二層を数え、壁部の崩落土と周囲からの流入土が混りあった暗褐色土が主体である。両層にわたり多くの礫の混入が認められる。

この他に中世のものとしては、空堀外から出土した青磁片2点がある。



第17図 SD 01空堀実測図

第5章 ま と め

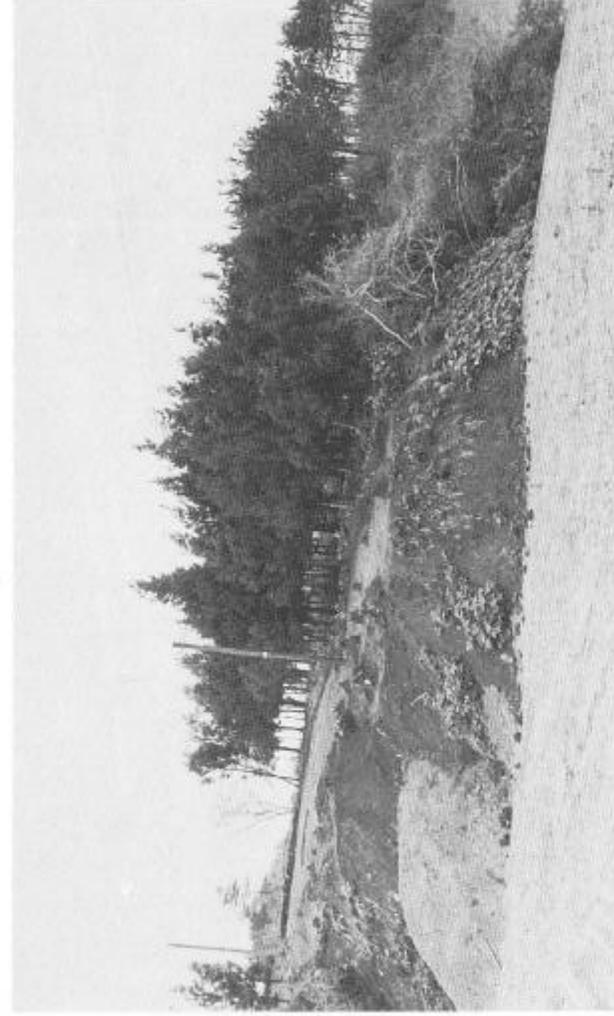
小浜沢遺跡は縄文時代前期と城長根と呼ばれる中世館跡の複合遺跡である。縄文時代の遺構は竪穴住居跡1棟、竪穴状遺構2基、土壌5基が検出された。住居跡は出土遺物が極めて少なく、明確な時期を決定するには不十分であるが、堆積土2層下面から出土した底面に縄文を施文する土器底部細片、及び本遺跡出土の土器は全て前期前半に留まる事から、縄文時代前期前半のものと想定した。県内ではこの時期に比定される住居跡は検出されておらず資料に乏しい。S I 01竪穴住居跡は明確に検出された。柱穴は規則性を持って壁部に沿い設置されており、北辺を除く各辺に3本ずつ配置されたこれらの柱穴は、さらに浅い溝によって連結されている。炉は検出されなかったが、遺構内北東部2層下面で炭化物、焼土の散布がみられた事から地床炉の可能性はある。住居跡の面積は6.2㎡で小型のものである。

出土土器については、いずれも破片であるが、次の様な特徴がみられる。器表面には、斜行縄文もしくは撚糸文が施文され、一部は底面にも縄文を施文している。内面は口縁部付近に条痕もしくは条線を施文する例もある。器壁は厚く胎土に粗砂を含み、一部には繊維を混入する。器形はいずれも深鉢で、平底が多いが、あげ底状や底面の縁部が外に張り出すものもある。この様な特徴を有する土器は、縄文時代前期前半に相当すると考えられる。又、本遺跡で出土した口縁部に懸垂状の隆帯を付し、隆帯上及び口唇部に比較的大きな刺突（一部は指頭押圧の可能性）を加えた土器、及び胴部に縄文、体部下半には条線を斜状に施文する土器については県内にはほとんど類例が無く、今後の出土例を待つ必要があるが、茂屋下岱遺跡^(註1)出土の土器には、口頸部に1条ないし数条の隆帯を持ち、隆帯上及び口唇部に指頭押圧文を施す例があり、これらを「円筒下層a式と縄文条痕文土器との間に位置するものと仮定^(註2)」している事、又、深郷田遺跡出土のものには円筒下層a式直前の土器として、体部下半に胴部文様とは異なった角度で縄文を施す例があり、これらとの関連性を考慮してみる必要もあろう。

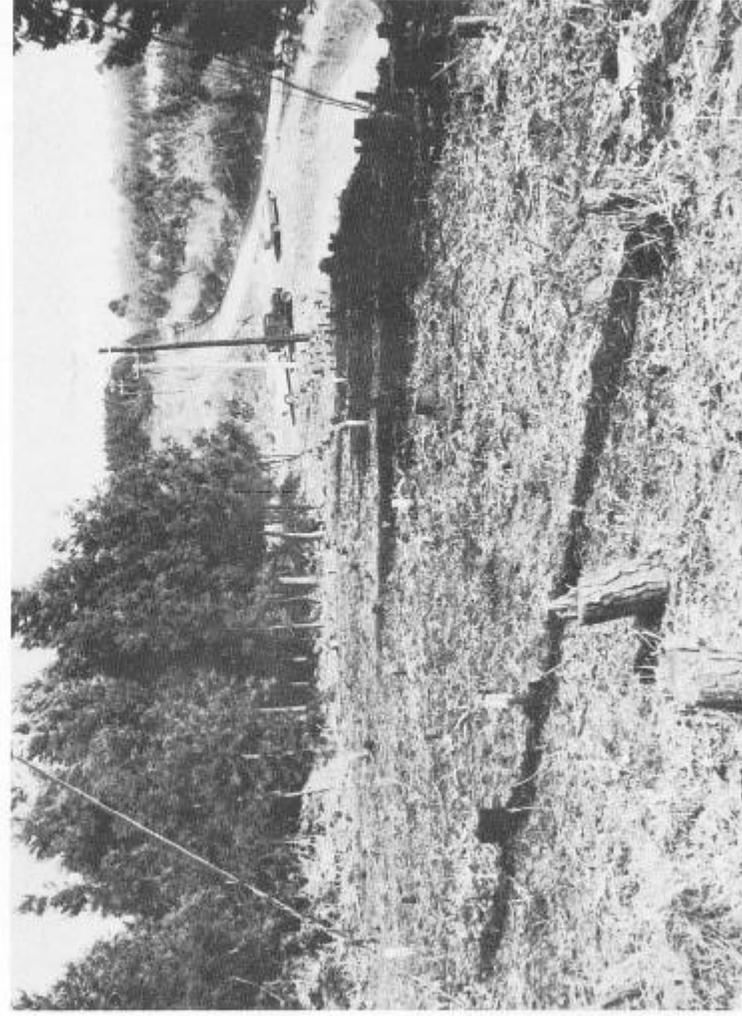
館跡に関しては出土遺物が極めて少なく、青磁片2片に止まった。遺構としては空堀が検出されている。調査部分は全長24.5mと短いが、調査区外にももう一条認められることなどから、舌状の平坦面を区画する機能のものと推察される。

註1 秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古学班「茂屋下岱式土器群」 1971年

註2 註1に同じ。



1



2

図版1 1・遺跡全景 2・発掘調査前



1

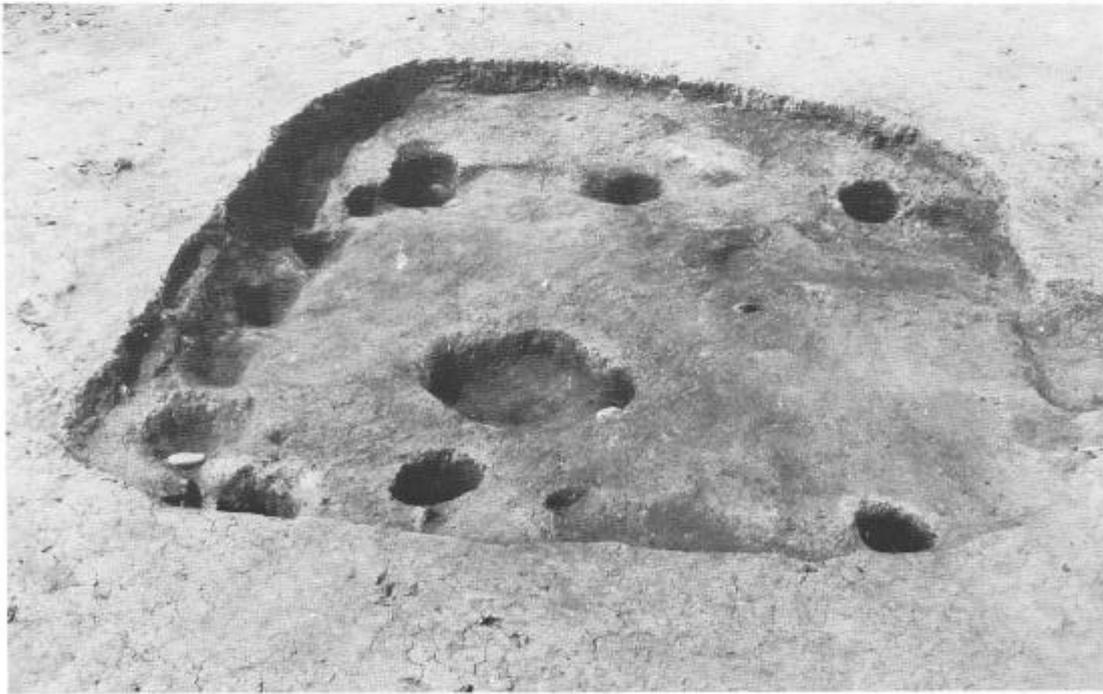


2

图版 2 1· 発掘調査風景 2· 調査終了状況



1



2

図版3 1・S1 01竪穴住居跡（東▶西） 2・S1 01竪穴住居跡（南▶北）



1



2

図版 4 1・SK1 01 竪穴状遺構 (西▶東) 2・SK03・04・05 土堀 (東▶西)



1

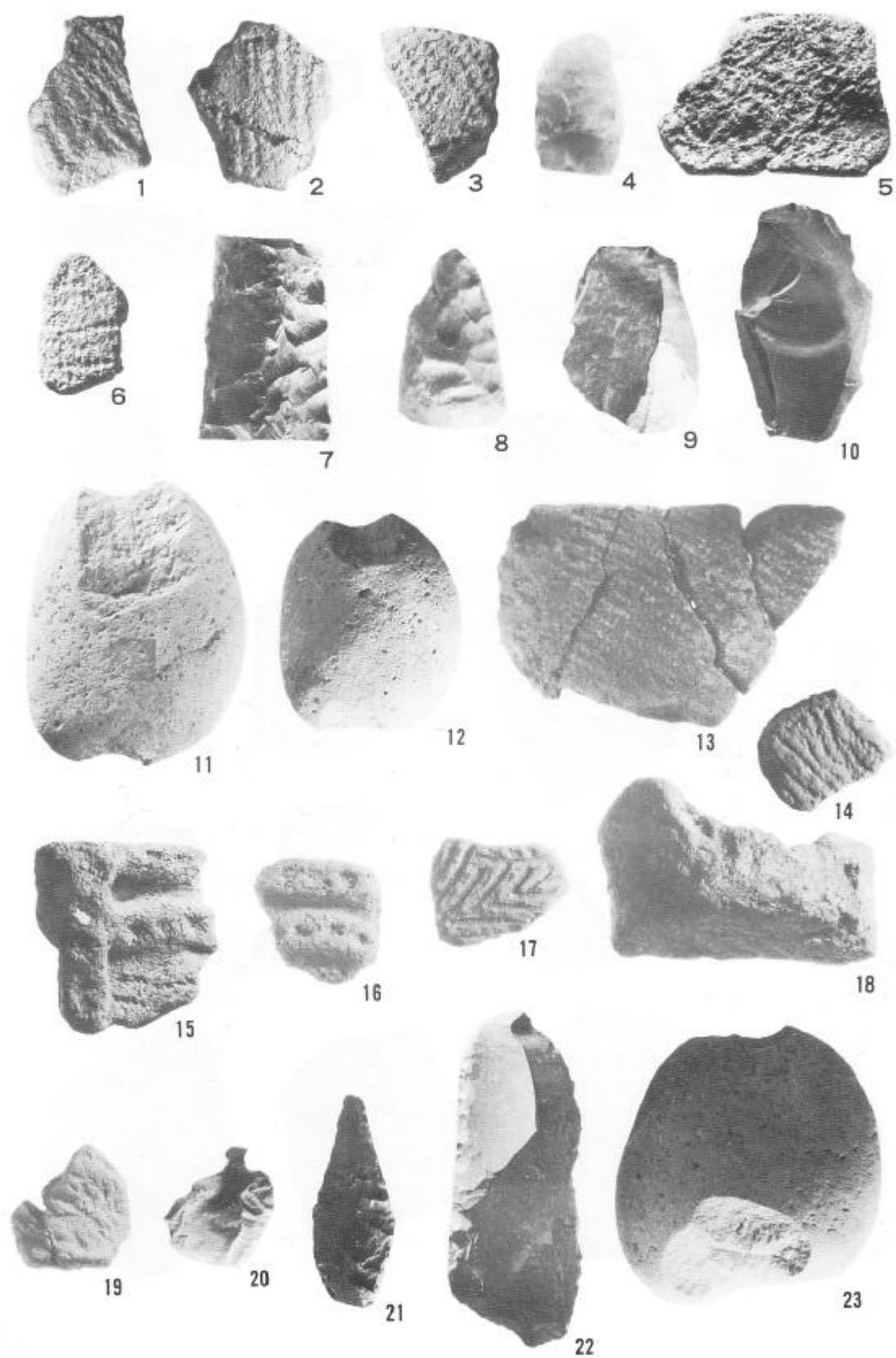


2

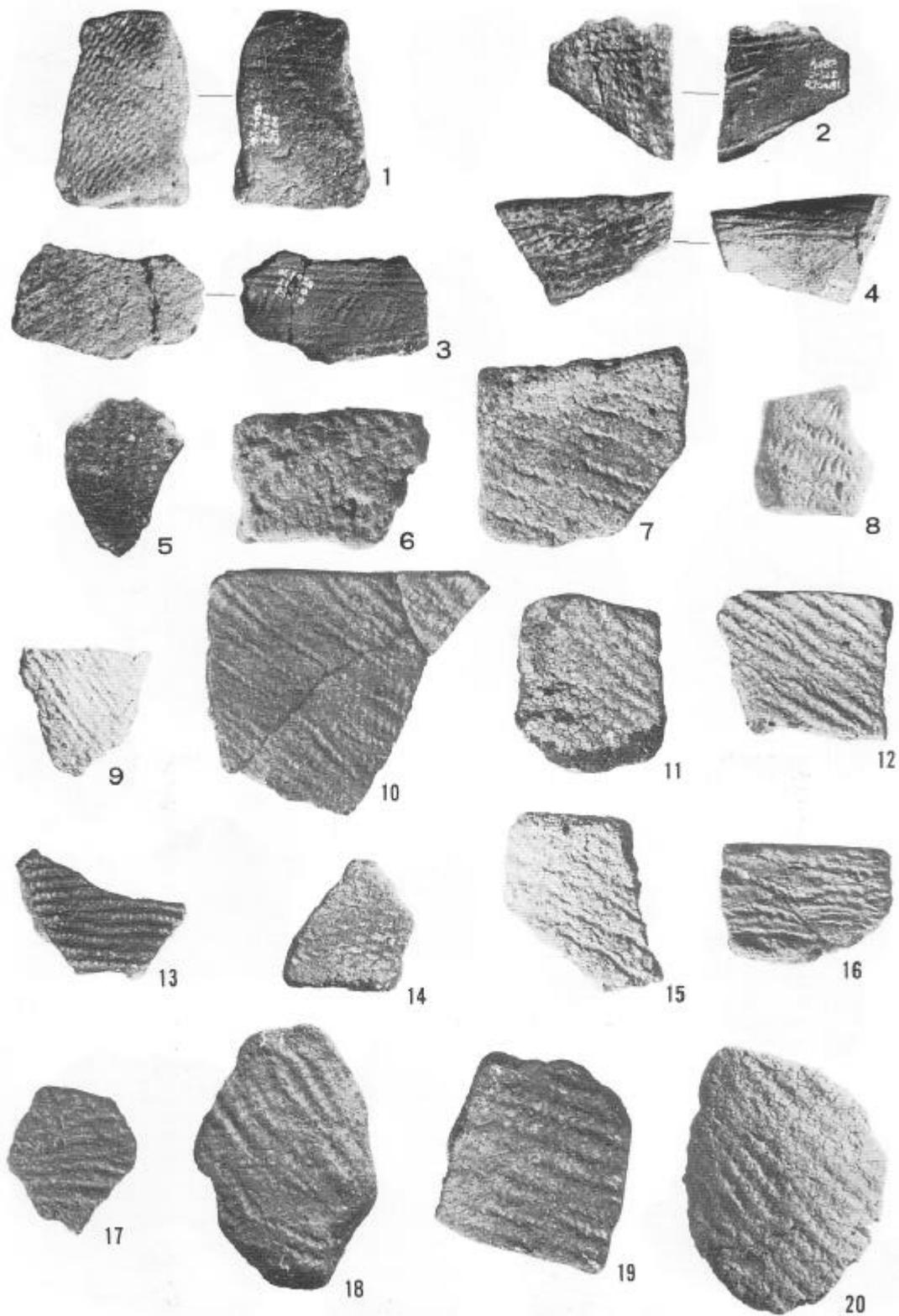
图版5 1・SKI 02竖穴状遺構(北▶南) 2・SKI 02竖穴状遺構(西▶東)



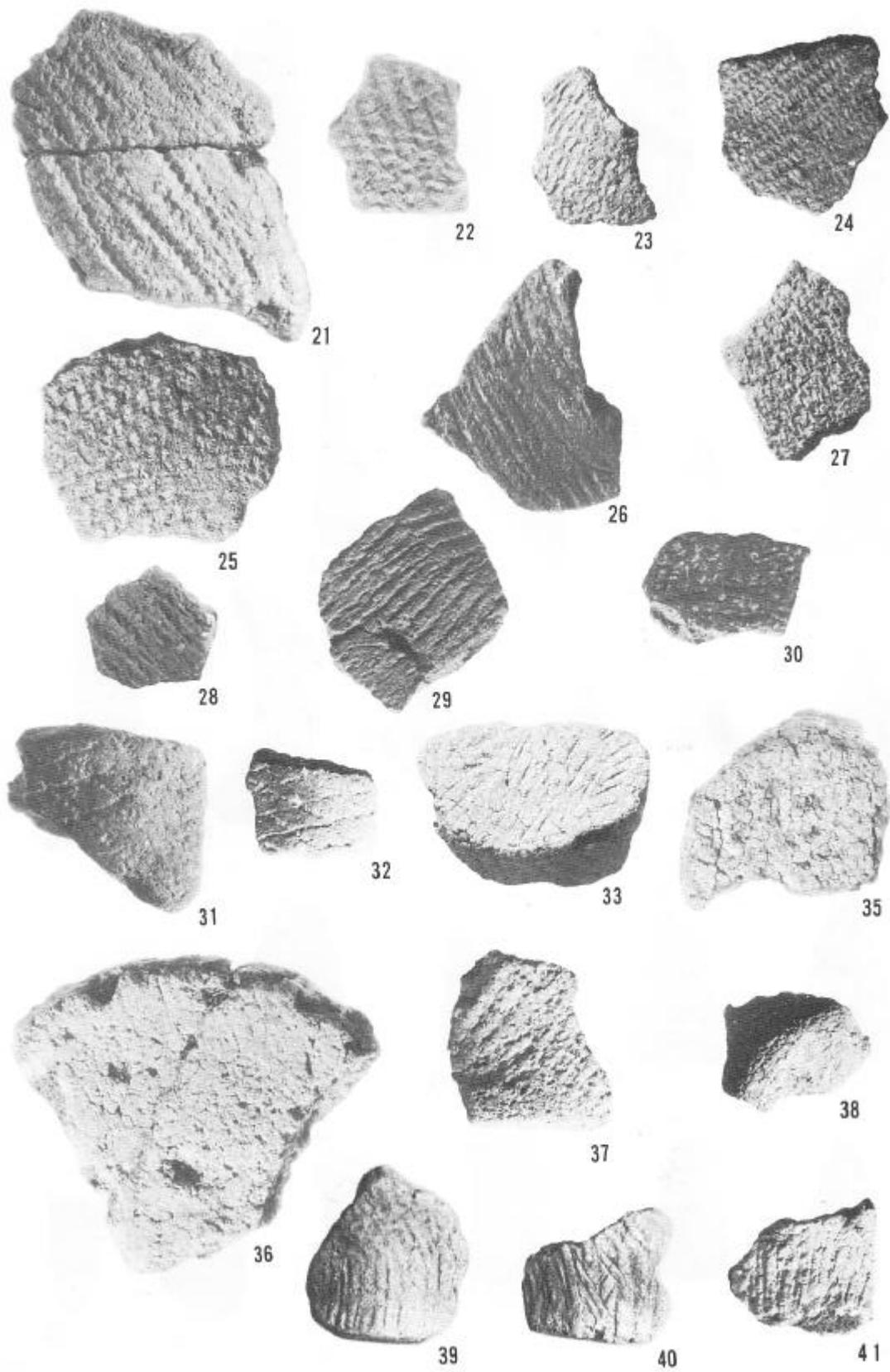
図版6 1・SD01空掘調査前 2・SD01空掘調査後



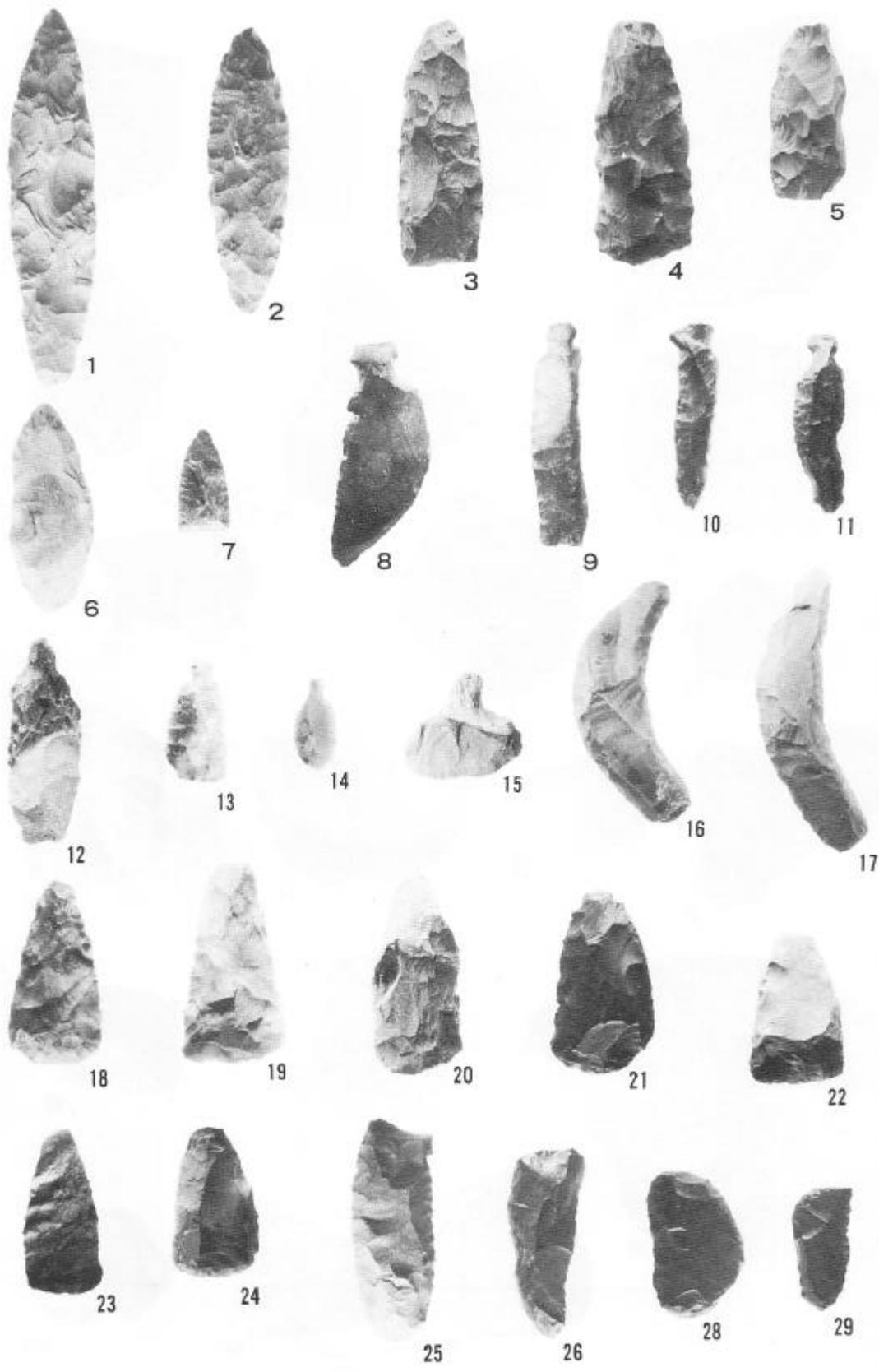
図版7 S I 01 (1~4) S K 03 (5~11)
 S K 04 (12) S K I 02 (13~23) 遺構内出土遺物



图版 8 遺構外出土土器



图版 9 遺構外出土土器



图版10 遺構外出土石器